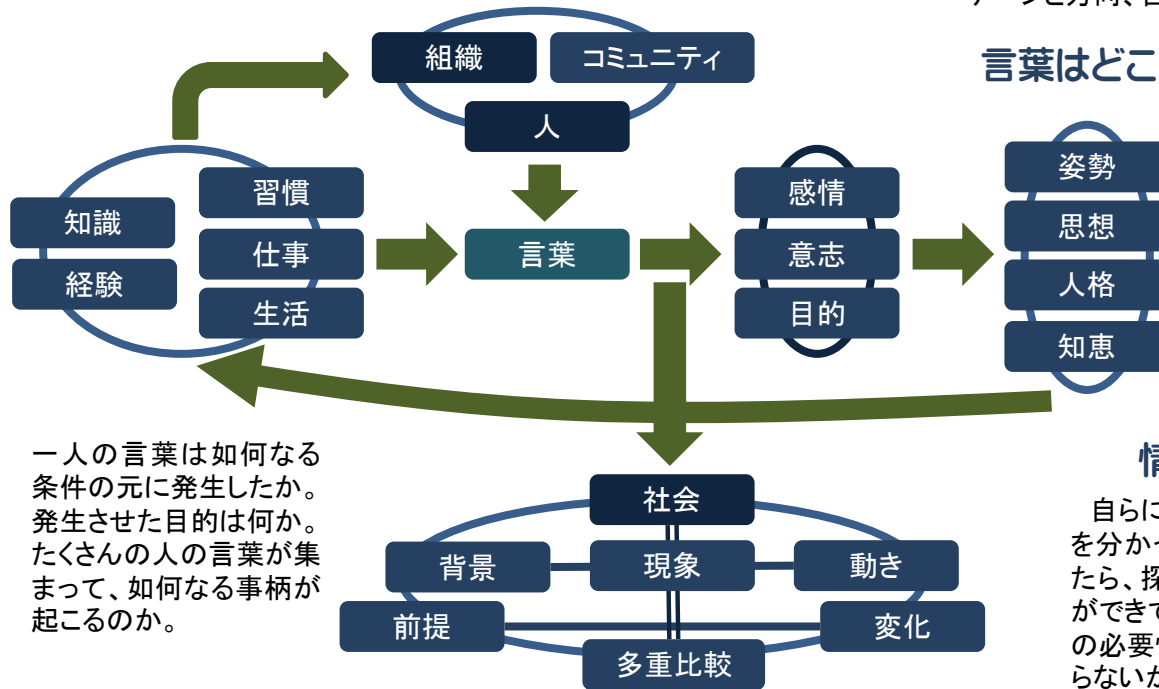


言葉を素材にする

文字が発明され、記録が残された。伝達が時間を経て、正確になった。印刷術が発明された故に、伝達速度が速くなった。写本から印刷になり、教育システムが一気に広がり、多くの人たちが知識を得られるようになった。インターネットが普及して、伝達に時間がかからなくなり、知識が知識を作りだすようになった。……………

「情報があふれている」と言われている。データは溢れ、日々増えている。しかし、使われて、自分たちに役だって情報になる。1週間にどれほどの情報に巡り合ったかと振り返れば、ゼロに近い。情報は外部に確かに存在しているが、情報であると意識するのは自分である。自らが情報の認識をしなければ情報は皆無である。情報が必要になるのは、自らが行動を起こして、行動の結果が未来にあり、結果を最良にするために情報を探す。目的を持たなければ、情報は不要である。



一人の言葉は如何なる条件の元に発生したか。発生させた目的は何か。たくさんの方の言葉が集まって、如何なる事柄が起こるのか。

「まあ、いいだろう」では済ませない。

インターネットにはデータは無数にあると思ってもいいだろう。日々、データが増えていく。日本語データだけで100億件を超える。他言語データを含めれば、兆の件数になるかもしれない。ゴミのようなデータがあるかもしれないが、ゴミデータも見方によっては有効になる。どのデータも削られない。見ている(見えている)データがすべてではない。そのデータ量は、砂浜での一握の砂の量にもならないだろう。見たデータで判断して「まあ、いいだろう」では不安がつきまとう。

一人で、すべてのデータを読み込み、精査できない。組織人全員が分担しても無理だろうし、結果を一つにまとめるための作業も不可能に近い。ここはコンピュータに任せるべきである。

しかし、「何々を求めたい、見つけたい」との意思、目的が必要になる。ステージと方向、目的、成果、次へのステップまでの流れが必要になる。

言葉はどこから現れてくるのか、どこへ行くのか。

言葉は、人が発する。一人である。組織としての言葉でも一人である。憲法は総意としているが、一人である。少なくとも、一つの言葉を使う時、知識、経験、仕事、文化をもって、言葉を吐き出す目的が存在する。さらに、言葉が使われた後、受け取った者の文化、立場等々があって、意味に幅ができる。場合によっては、思惑とは異なる逆へと進むかもしれない。

一つの言葉は、相手に渡って発散する。その対象、範囲、転換の想定も必要とする。

情報を探すのではなく、言葉を見守る

自らにとっての意味を見つけたとき、初めて情報になる。探し物を分かっていない。何を探しているかが分からない。分かっていたら、探す前に答えが出ている。解がなくともいくつかの選択肢ができていく。自らの行動の最適さ、行動変化の条件、方向転換の必要性等々。これらはすべて組織外にある。どこにあるか分からないから、ただ探す。毎日出てくるデータを、言葉を見守る。

変化の芽はいつ現れるか分からない。常に観察をしていなければならぬ。